青森市埋蔵文化財調査報告書 第78集

三内丸山(8)遺跡

発掘調査報告書

平成16年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第78集

三内丸山(8)遺跡

発掘調査報告書

平成16年度

青森市教育委員会

口絵１

SI-01　完掘状況（W→）

SI-01内　Pit２　セクション及び出土遺物

口絵２

SX-01（第１面） 確認状況（N→）

SX-01（第２面） 確認状況（N→）

序

青森市内には、現在300箇所以上の遺跡が所在しています。

市内では、遺跡が密集する地域がいくつか挙げられ、その中でも特別史跡 三内丸山遺跡が所在する三内地区は、多くの遺跡が密集する地域として代表されます。

三内丸山（８）遺跡は、その三内地区に所在しており、平成15年度に都市計画道路３・４・15号里見丸山線工事に伴い発見した遺跡であり、本書は、平成16年度に当委員会が実施した発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡の調査成果が、本市の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後に、本書を刊行するにあたり、調査委託者をはじめ関係各機関・関係各位のご理解・ご協力に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

平成17年３月

青森市教育委員会

教育長　**角　田　詮二郎**

例　　言

１．本書は青森市教育委員会が発掘調査を実施した青森県青森市大字三内字丸山に所在する三内丸山（８）遺跡の発掘調査報告書である。

２．本書に記載される内容は、平成16年度に実施した都市計画道路３・４・15号里見丸山線建設工事に係る発掘調査成果についてまとめたものである。

３．本遺跡は、平成15年度に市内遺跡発掘調査事業の一環として実施した試掘調査によって発見され、青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号01315に登録されている。

４．本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、設楽政健、児玉大成が担当した。

５．竪穴住居跡から出土した炭化物の年代測定・樹種同定並びに出土土師器の胎土分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果報告は第Ⅳ章に収めている。

６．調査に係わる出土遺物・記録図面類・写真関係資料は、一括して青森市教育委員会が保管している。

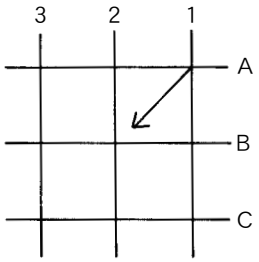
７．引用・参考文献は巻末に収めた。

８．発掘調査及び報告書作成にあたって、次の機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

青森県教育庁文化財保護課　青森市都市整備部道路建設課

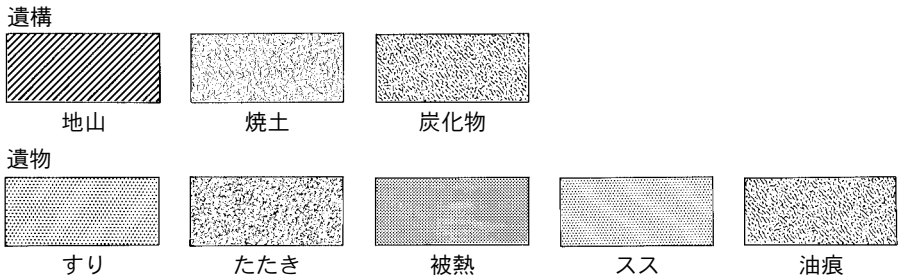
凡　　例

1．図版及び表番号は一冊を通じて連続するものとし、「第１図」「第１表」としたが、依頼原稿については「図○、表○」とした。
2．各種平面図の方位は磁北を示した。
3．遺構の略号は、ＳＩ＝竪穴住居跡、ＳＸ＝屋外炉、ＳＮ＝カマドである。
4．遺構の規模はcmで示している。
5．本書の土層注記については、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1993）に準拠した。
6．縄文原体に関する用語は『日本先史土器の縄文』（山内清男 1969）に概ね準拠した。
7．遺物実測図の縮尺は、土器＝1/3、石器・土製品＝1/2、礫石器＝1/4である。なお写真図版については縮尺の統一を図っていない。
8．石器観察表における石質の略号は次のとおりである。
「輝・凝」→輝緑凝灰岩、「安」→安山岩、「石・安」→石英安山岩、「デ」→デイサイト、「変・安」→変朽安山岩
9．グリッドの呼称は次のとおりである。



例　A-1グリッド

10．図中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。



11．遺物の分類は次のとおりである。
土　器
第Ⅰ群　縄文時代中期の土器
１類．円筒上層ｅ式土器に比定されるもの
２類．最花式土器に比定されるもの

３類．縄文時代中期中葉～中期末葉の土器

第Ⅱ群　縄文時代後期の土器

１類．十腰内Ⅰ式土器に比定されるもの

ａ．横位の沈線文をもつもの

ｂ．弧状文をもつもの

ｃ．沈線による格子状文をもつもの

ｄ．無文のもの

第Ⅲ群　弥生時代前期の土器

第Ⅳ群　平安時代の土器

石　器

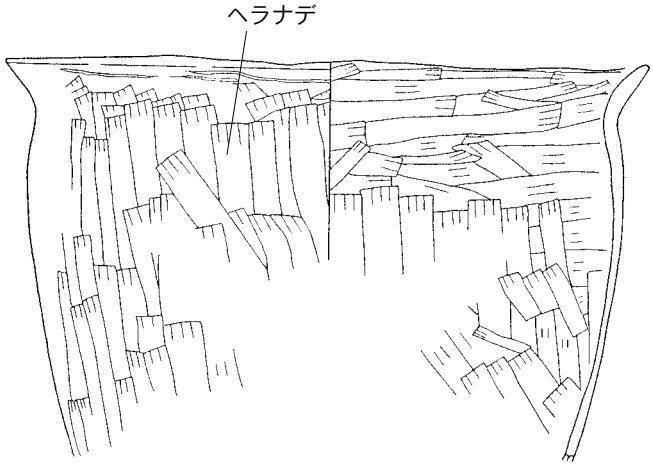
Ａ．不定形石器

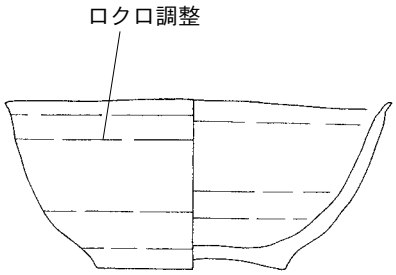
Ｂ．磨製石斧

Ｃ．敲磨器類

土製品

12．実測図の表現





目　　次

序
例言
凡例
目次
図版目次

第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査要項……1
　第３節　調査方法……2
　第４節　調査経過……2
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第１節　遺跡の地理的環境……5
　第２節　遺跡の歴史的環境……5
　第３節　基本層序……8
第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物
　第１節　概要……9
　第２節　検出遺構……9
　　（１）竪穴住居跡
　　（２）屋外炉
　第３節　遺構外出土遺物……12
　　（１）土器
　　（２）石器
　　（３）土製品
第Ⅳ章　自然科学分析
　第１節　三内丸山（８）遺跡の放射性炭素年代測定……17
　第２節　三内丸山（８）遺跡出土土師器の胎土分析……18
まとめ……22
引用・参考文献
写真図版

図版目次

第１図　遺跡位置図・遺構・グリッド配置図……３
第２図　周辺の遺跡位置図……６
第３図　基本層序……８
第４図　ＳＩ－01①……10
第５図　ＳＩ－01②・ＳＸ－01・ＳＩ－01
　　出土土器……11
第６図　ＳＸ－01出土遺物……12
第７図　遺構外出土遺物①……14
第８図　遺構外出土遺物②……15

表　目　次

第１表　周辺の遺跡……６
第２表　ＳＩ－01出土土器観察表……16
第３表　ＳＸ－01出土土器観察表……16
第４表　ＳＸ－01出土石器観察表……16
第５表　遺構外出土土器観察表……16
第６表　遺構外出土石器観察表……16
第７表　遺構外出土土製品観察表……16

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

平成15年２月17日、青森市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より都市計画道路３・４・15号里見丸山線の道路建設事業に係る「埋蔵文化財（遺跡）等協議書」が青森市教育委員会文化財課（以下、当委員会）に提出された。

埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡）の位置関係を照会した結果、開発予定地は周知の遺跡に該当していなかったものの、周辺に特別史跡 三内丸山遺跡など数多くの遺跡が所在していたことから、遺跡保護と開発行為との円滑な調整を図るため試掘調査を実施する方向性となった。

試掘調査は、平成15年12月22日に実施し、開発予定地に任意にトレンチを２地点設定し、重機による掘削及び必要に応じて鋤簾がけを行った。調査面積は500㎡である。

試掘調査の結果、平安時代の竪穴住居跡１軒、縄文土器片、土師器片などを確認したため、遺跡であることが判明し、新規遺跡として登録した。

道路建設課は、青森市長名で平成16年６月17日付け青市道建第69号にて、当委員会を経由して青森県教育委員会教育長宛に土木工事等のための発掘に関する通知書を提出し、６月23日付け青教文第376号にて、同教育長から事前の発掘調査が必要である旨の回答がなされた。

これらを踏まえて、道路建設課より青森市長名で平成16年５月25日付け青市道建第71号により当委員会教育長宛に発掘調査の依頼文書が提出され、７月12日付け青市教委文第116号にて受諾の旨を回答し、８月３日に発掘調査委託契約を締結した。

発掘調査は、下記の調査要項のとおり平成16年10月25日～11月26日の期間で実施することとなった。

第２節　調査要項

１．調 査 の 目 的

都市計画道路３・４・15号里見丸山線改良工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

２．遺跡名及び所在地　三内丸山（８）（さんないまるやまかっこはち）遺跡
（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号　01315）青森市大字三内字丸山

３．事 業 実 施 期 間　平成16年８月３日～平成17年３月31日

４．発掘調査実施期間　平成16年10月25日～平成16年11月26日

５．調　査　面　積　500㎡

６．調 査 委 託 者　青森市都市整備部

７．調 査 受 託 者　青森市教育委員会

８．調 査 担 当 機 関　青森市教育委員会事務局文化財課

９．調 査 指 導 機 関　青森県教育庁文化財保護課

10．予　算　措　置　調査委託者側で措置

11. 調　査　体　制

調査事務局　青森市教育委員会

教　育　長	角田　詮二郎
教育部長	古山　善猛
教育次長	最上　　進
参　　事	
文化財課長事務取扱	遠藤　正夫
同　主　幹	多田　弘仁
主　　査	辻　　文子
文化財主事	小野　貴之
文化財主事	木村　淳一
文化財主事	児玉　大成（調整担当）
文化財主事	設楽　政健（調査担当）

（児玉　大成）

第３節　調査方法

グリッドの設定については公共座標に基づいて、任意に４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。グリッドの呼称については、調査区東側から西側に向かってアルファベット、南側から北側に向かって算用数字を付し、各グリッドの呼称はアルファベットと算用数字の組み合わせで示した。

発掘調査については、調査開始以前に重機による表土処理がなされていたため、着手時から直ちに鋤簾がけによる遺構確認を実施することができた。遺構確認終了後、随時遺構の精査を開始した。遺構の呼称については、竪穴住居跡をＳＩ、屋外炉をＳＸ、住居内から検出されたカマドをＳＮとした。遺構の精査については、竪穴住居跡は４分法、屋外炉は２分法を採用し、セクション図を作成した。平面図については、トータルステーションを用い、図面の縮尺については必要に応じて1/20、1/10で作図した。

写真撮影については、35㎜のモノクローム、リバーサルフィルムの各フィルムを採用した。

第４節　調査経過

11月１日　調査開始。既に重機で表土処理されていたので、鋤簾がけから開始。表土の一部と笹の根が残っていたのでその除去作業に時間を要した。

11月12日　15年度の試掘調査ですでに検出されていた平安時代の竪穴住居跡の精査開始。このころから、風雨や降雪が続き、調査の進捗に支障が生じた。

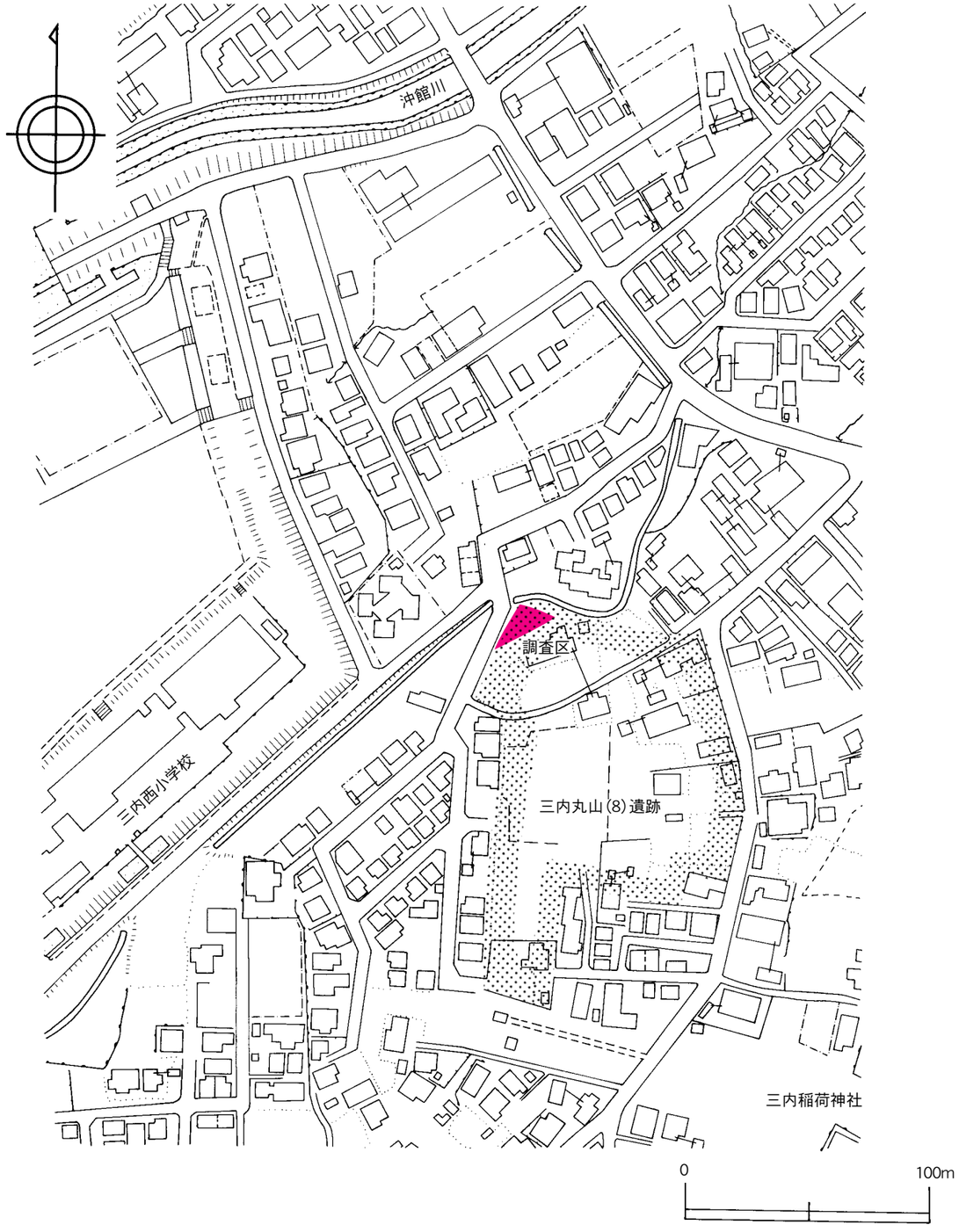
11月18日　カマドを検出し精査にはいる。

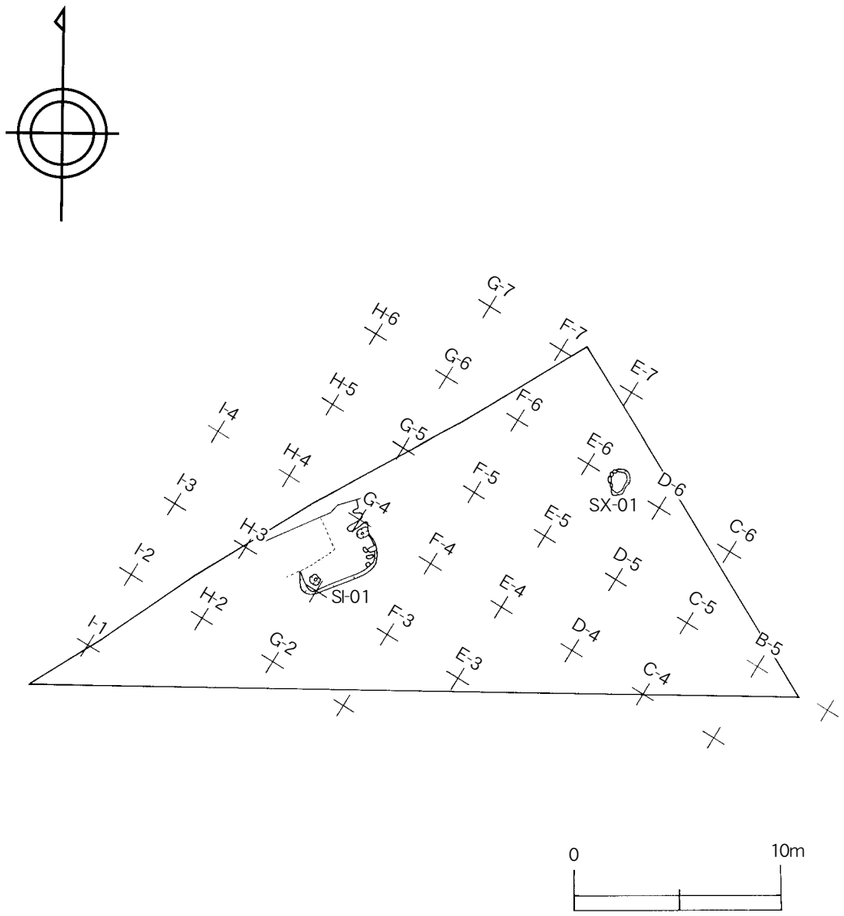
11月22日　調査区東側から縄文時代中期後半の遺物が密集する範囲を検出。

11月23日　カマド精査終了。竪穴住居跡精査終了。

11月24日　遺物が密集する範囲を掘り下げていった結果、屋外炉と考えられる遺構を検出した。

11月26日　屋外炉の精査を終了。調査終了。





第1図　遺跡位置図・遺構・グリッド配置図

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　遺跡の地理的環境

三内丸山（８）遺跡は、青森市大字三内字丸山に所在している。青森市の地形は、北は陸奥湾に面して広がる青森平野、西は海成起源の岡町層及び八甲田火砕流堆積物で構成される丘陵地、東は東岳山地、南は八甲田火砕流堆積物で構成された火山性台地によって成り立っている。本遺跡は西部の丘陵地から続く海成起源の緩やかな台地上に立地しており、北側には沖館川、東側には西滝川（入内川）が流れている。

遺跡周辺は宅地であり、西側～南側にかけて国道７号バイパスが走っている。三内・安田地区は陸上自衛隊青森駐屯地、旧県総合運動公園、青森県運転免許センター、青森市立三内中学校、青森市立三内西小学校などの多くの公共施設が存在しており、民間関係の開発計画も多い地区である。

第２節　遺跡の歴史的環境

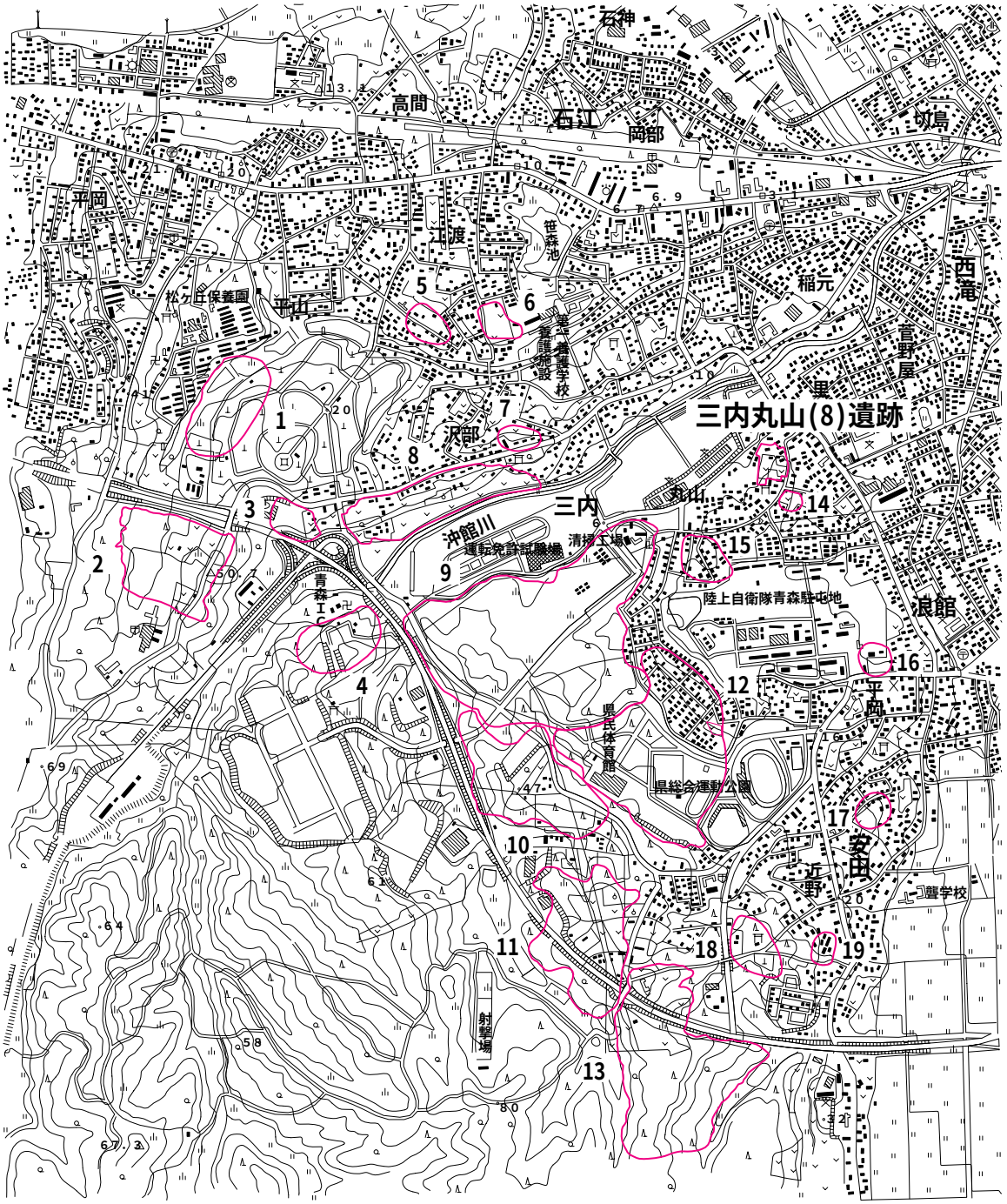
三内という地名は、江戸時代の頃には北畠家の家記『永禄日記』や菅江真澄の著書『栖家の山』によって、縄文時代の遺物が数多く出土する場所として紹介されている。

本遺跡では、平安時代の竪穴住居跡１軒、縄文時代中期後半の屋外炉１基が検出され、遺物は、土師器、縄文時代前期～後期の土器・石器が出土している。本遺跡が立地する海成起源の台地上に特別史跡三内丸山遺跡をはじめ、多くの遺跡が存在している。これらの遺跡の帰属する時期は縄文時代（早期・前期・中期・後期・晩期）、弥生時代、平安時代である。本項ではこれらの遺跡について帰属する時期ごとに概観していきたい。

縄文時代早期については、市内全体でも当該期の遺構が検出された例はなく、三内・安田地区においても三内沢部（１）遺跡、三内遺跡、近野遺跡、三内丸山遺跡、三内丸山（６）遺跡で土器が出土しただけである。いずれも出土数は数点である。

縄文時代前期になると、三内丸山遺跡が出現する。三内丸山遺跡は昭和42年、平成４・５年に青森市教育委員会による発掘調査、昭和51・52年のほか、平成４年から継続して青森県教育委員会による発掘調査が行われており、縄文時代前期～後期の多数の竪穴住居跡、土坑、掘立柱建物跡、盛り土、捨て場、道路跡、土坑墓、配石遺構等のほか、縄文時代の大集落跡とともに平安時代の集落跡も検出されており、学術的な重要性から平成９年には国史跡、平成12年には国特別史跡に指定された。三内・安田地区に存在する多くの遺跡で前期の遺物が出土しているが、遺構が検出されているのは三内丸山遺跡以外に、近野遺跡と三内霊園遺跡のみである。

縄文時代中期になると、三内丸山遺跡のほかに三内丸山（６）遺跡、三内沢部（１）遺跡、三内遺跡のように、竪穴住居跡を30～70軒有する、中～大規模集落がみられる。三内丸山遺跡は、前述したように縄文時代前期～後期の多数の遺構が検出されているが、竪穴住居跡、土坑、土坑墓、配石遺構などの多くは縄文時代中期（特に中葉以降）の所産であることが明らかになっている。三内丸山（６）遺跡は平成９・11年に青森県教育委員会によって発掘調査が行われており、縄文時代中期～後期の竪穴住居跡70軒、掘立柱建物、縄文時代中期～晩期の土坑、後期前半の埋設土器遺構等の遺構が検出されたほか、遺物は早



第2図　周辺の遺跡位置図（1/25,000）

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　期	文　献
1	01018	三内霊園遺跡	青森市大字三内字沢部	縄文(前･中)	1962　青森市教育委員会
2	01240	三内沢部(４)遺跡	青森市大字三内字沢部		
3	01064	三内沢部(１)遺跡	青森市大字三内字沢部	縄文(早･前･中)	1978ｂ　青森県教育委員会
4	01019	三内遺跡	青森市大字三内字丸山	縄文･平安	1978ａ　青森県教育委員会
5	01056	石江遺跡	青森市大字石江字平山	縄文(前)	

番号	遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　期	文　献
6	01163	江渡遺跡	青森市大字石江字江渡	縄文(中・後)・奈良・平安	2004ｂ　青森市教育委員会
7	01162	三内沢部(２)遺跡	青森市大字三内字沢部	縄文(中)	
8	01239	三内沢部(３)遺跡	青森市大字三内字沢部	縄文・平安	
9	01021	三内丸山遺跡	青森市大字安田字近野、三内字丸山	縄文(前・中・後・晩)・平安・中世	1994　青森県教育委員会ほか
10	01250	三内丸山(５)遺跡	青森市大字三内字丸山	縄文(中・晩)	2004　青森県教育委員会
11	01282	三内丸山(６)遺跡	青森市大字三内字丸山	縄文(中・後・晩)	1999ｂ・2000・2001ｂ・2002ａ　青森県教育委員会
12	01065	近野遺跡	青森市大字安田字近野、三内字丸山	縄文(前・中・後)・平安	1974・1975・1977・1997・2002ｂ　青森県教育委員会、2003　青森市教育委員会
13	01016	安田(２)遺跡	青森市大字安田字近野	縄文(前・後)・弥生・平安	1999ａ・2001ａ　青森県教育委員会
14	01248	三内丸山(３)遺跡	青森市大字三内字丸山	平安	
15	01011	浪館(１)遺跡	青森市大字三内字丸山	縄文(前)	
16	01012	浪館(２)遺跡	青森市大字浪館字平岡	縄文(中・晩)	
17	01309	安田近野(２)遺跡	青森市大字安田字近野	縄文(前)	
18	01014	安田近野(１)遺跡	青森市大字安田字近野	縄文(後)	
19	01015	安田(１)遺跡	青森市大字安田字近野	縄文(前)	

期～晩期の土器や石器、土製品等が出土しているが、多くの遺構は縄文時代中期中葉～後期前半の所産であり、特に中期中葉に属するものが多い。三内沢部(１)遺跡は、縄文時代中期中葉～後半の竪穴住居跡39軒、埋設土器遺構３基、土坑101基などが検出されている。その内、中の平Ⅲ式期の第９号竪穴住居跡から確認された炉は沢部型複式炉と呼ばれている。

縄文時代後期になると、三内丸山遺跡では遺構数の減少が顕著となり、その周辺では近野遺跡、三内丸山(６)遺跡のように竪穴住居跡を２～20軒有する小～中規模集落がみられる。近野遺跡は、昭和48～50年・平成13年・15年に青森県教育委員会、平成14年に青森市教育委員会による発掘調査が行われ、縄文時代前期後半の竪穴住居跡４軒、縄文時代中期前半の竪穴住居跡、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡２軒、縄文時代後期前半の小竪穴、縄文時代前期後半・縄文時代中期後半の土坑、縄文時代後期前半の遺物包含層等のほか、平安時代の集落跡が検出されている。遺物は縄文時代後期前半の十腰内Ⅰ式土器・土偶が多量に出土したほか、早期末～中期の土器、石器、北海道式石冠等が出土している。三内丸山(６)遺跡は中期中葉～後葉が主体であるが、後期の遺構が比較的多く検出されており、土器・石器のほかクマ形土製品が出土している。その他、周辺では、後期前葉の竪穴住居跡などが検出された安田(２)遺跡や、後期の土器棺墓が検出された三内丸山(５)遺跡がある。

縄文時代晩期では、三内丸山(６)遺跡、三内丸山遺跡、近野遺跡、三内丸山(５)遺跡などの多くの遺跡において土器が出土しているが、遺構が検出されているのは三内丸山(６)遺跡と三内丸山遺跡だけである。検出された遺構は晩期前葉の土坑であり、出土土器は晩期前葉～中葉の土器である。

弥生時代の主な遺跡については、安田(２)遺跡、江渡遺跡が挙げられる。遺構は検出されていないが、弥生時代前期～後期の土器が出土している。

平安時代では近野遺跡、安田(２)遺跡、三内遺跡、三内丸山遺跡、江渡遺跡において、多くの竪穴住居跡・土坑等が検出されたほか、生業に関連する遺構・遺物などが検出されている。多くの遺跡の帰属

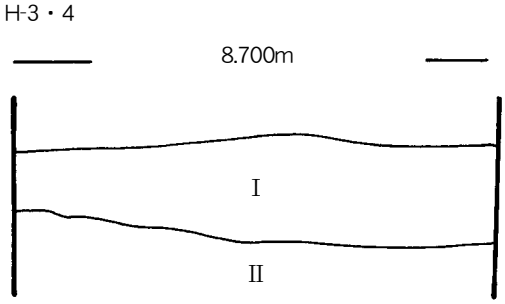
時期は、９世紀後半～10世紀前半と考えられるが、江渡遺跡については、９世紀前半～後半代の集落跡が検出されており、特筆される。

近野遺跡は縄文時代前期後半～後期前半の集落跡のほか、平安時代の竪穴住居跡116軒が検出され、遺物は土師器・須恵器・土製品・鉄製品・石製品等が出土している。安田（２）遺跡は、平成９・11・12年に青森県教育委員会によって発掘調査が行われており、縄文時代中期～後期の集落跡のほか、平安時代の竪穴住居跡23軒、鍛冶炉２基等が検出され、遺物は土師器・須恵器・土製品・鉄製品・鉄滓等が出土している。三内遺跡は縄文時代中期～後期の集落跡のほか、平安時代の竪穴住居跡29軒、土坑13基、溝６条等が検出され、遺物は土師器・須恵器・擦文土器・製塩土器・鉄製品・石製品・角加工品等が出土している。三内丸山遺跡は縄文時代前期～後期の集落跡のほか、江渡遺跡は、縄文中期末葉を主体とした集落跡のほか、平安時代の竪穴住居跡５軒、土坑、ピット、溝跡等が検出され、遺物は土師器・須恵器・擦文土器・石器・鉄滓・鉄製品などが出土している。

第３節　基本層序

本遺跡では、10数年前から廃材等が投棄されていたこともあり、撹乱が激しく、平成15年度の試掘調査の際にも遺構確認面の直上に廃材等が混入した土層が堆積しているという状況であった。

今回の発掘調査では、調査開始以前に重機によって表土処理がなされ、遺構確認面からの調査であったため、本遺跡内の層序の確認は困難を要したが、調査区内北側の斜面で一部黒色土を検出した。



第3図　基本層序

第Ⅰ層　10YR2/2　黒褐色土　平安時代の遺物を包含
第Ⅱ層　10YR3/2　黒褐色土　縄文時代中期～後期前半の遺物を包含

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物

第１節　概要

本遺跡の発掘調査では、平安時代の竪穴住居跡１軒、屋外炉１基を検出したほか、遺物についてはダンボール箱２個分の遺物が出土した。時期については、縄文時代中期～晩期・弥生時代・平安時代にわたり、主体は縄文時代中期後半～後期前半である。

第２節　検出遺構

（1）竪穴住居跡

ＳＩ－０１（第４図）

［位　　置］Ｆ・Ｇ－３で検出した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］一部、調査区外であるが、北東～南西方向を長軸、北西～南東方向を短軸とする隅丸方形を呈し、長軸380×短軸350㎝を測る。住居南西部分は撹乱が激しく、コンクリートや砂利が多量に混入していた。

［　壁　］壁の高さは、東壁19㎝、南壁６㎝、北壁11㎝を測る。いずれの壁も緩やかに立ち上がっている。西側については、撹乱のため壁は残存していなかった。

［　床　］部分的に貼床である。削平を受けており、凹凸が激しい。床面は堅緻である。住居跡北東隅より炭化物・炭化材・粘土の範囲を検出した。

［壁　　溝］なし。

［カ マ ド］北壁から１基検出した。削平のため、煙道は残存していない。主軸はＮ－148 °－Ｗである。袖は粘土による構築で、幅は39㎝を測る。火床面の規模は長軸51×短軸39㎝を測る。

［付属施設］ピット３基を検出した。ピットの規模はPit１＝50×44×13㎝、Pit２＝62×51×22㎝、Pit３＝29×21×５㎝を測る。いずれも主柱穴の機能はないと考えられる。カマド脇のPit１からは、土師器甕・土師器椀が出土している。

［堆 積 土］３層に分層した。２・３層は黒褐色を呈する土層、１層は黒色を呈する土層である。１・２層には焼土粒・炭化粒が混入し、３層には炭化物が混入することから人為的な堆積状況が窺える。

［出土遺物］カマド・Pit２から土師器坏が２点、甕の口縁部破片１点、甕の底部破片１点出土した。

（2）屋外炉

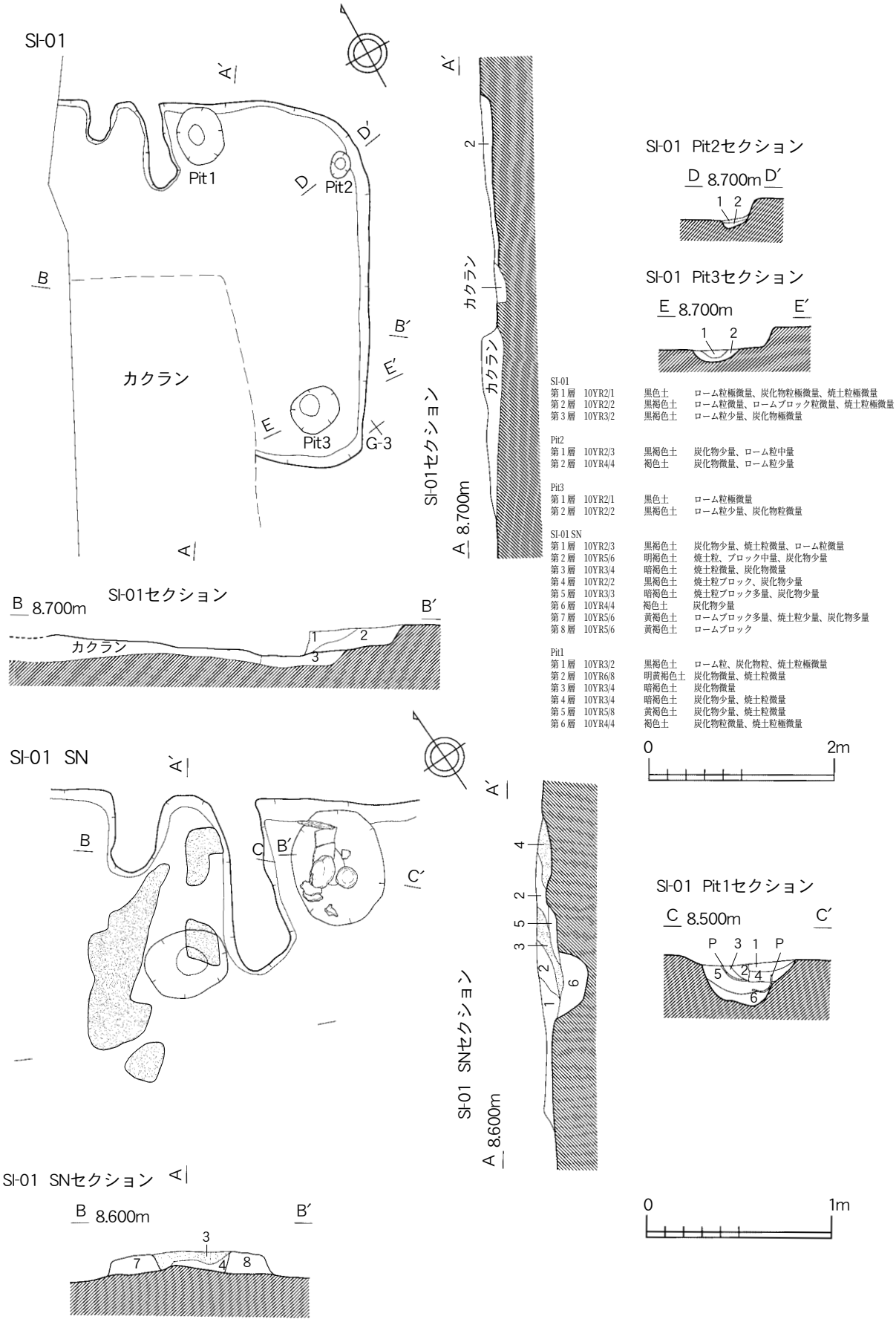
ＳＸ－０１（第５図）

［位　　置］Ｄ－５・６から検出した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は不整円形を呈し、長軸60×短軸46㎝を測る。外縁に礫が配されており、石囲炉と考えられる。

［出土遺物］炉の直上より、最花式土器１個体、剥片石器１点、礫石器２点が出土した。



SI-01

第１層	10YR2/1	黒色土	ローム粒極微量、炭化物粒極微量、焼土粒極微量
第２層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒微量、ロームブロック粒微量、焼土粒極微量
第３層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物極微量

Pit2

第１層	10YR2/3	黒褐色土	炭化物少量、ローム粒中量
第２層	10YR4/4	褐色土	炭化物微量、ローム粒少量

Pit3

第１層	10YR2/1	黒色土	ローム粒極微量
第２層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物粒微量

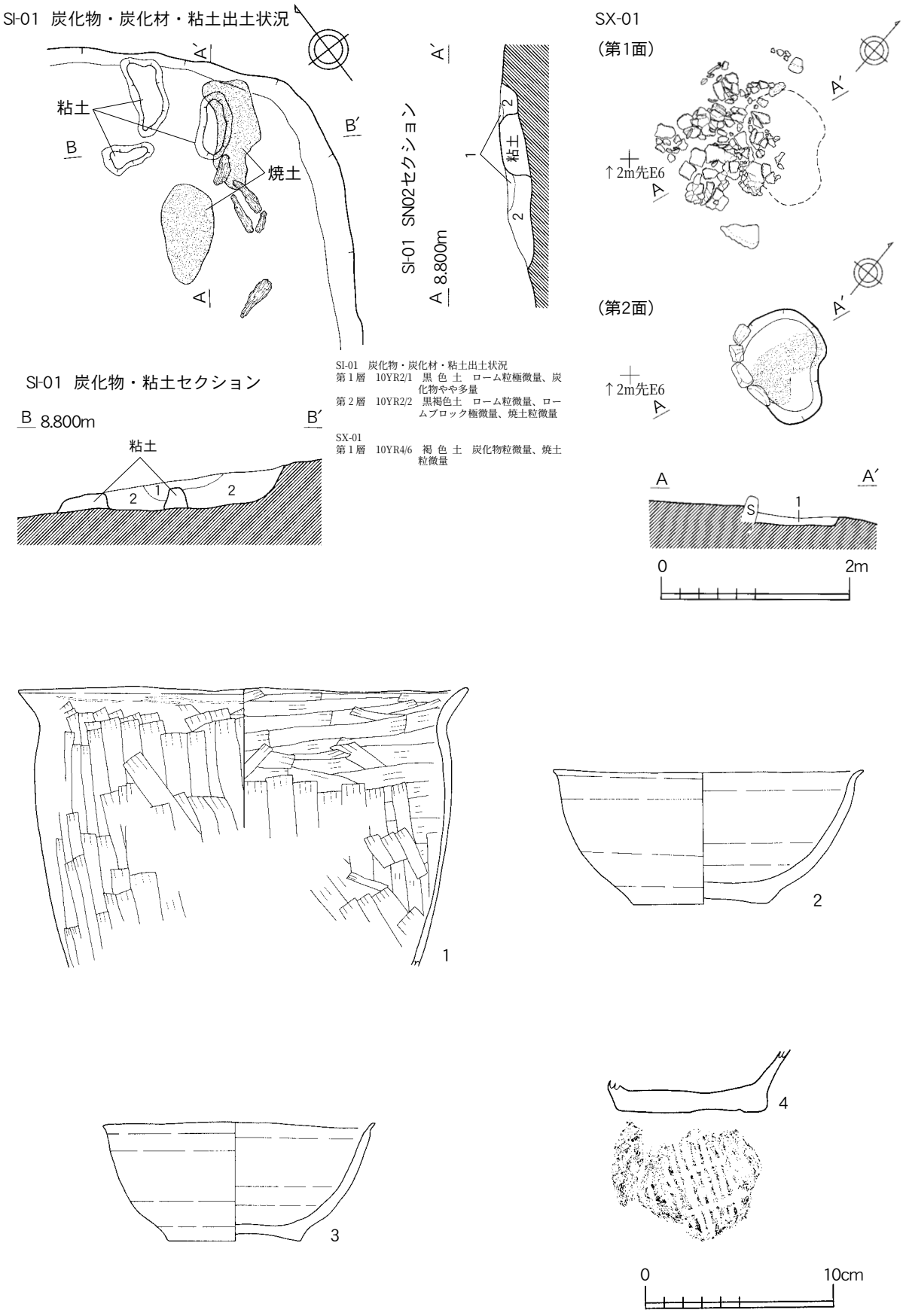
SI-01 SN

第１層	10YR2/3	黒褐色土	炭化物少量、焼土粒微量、ローム粒微量
第２層	10YR5/6	明褐色土	焼土粒、ブロック中量、炭化物少量
第３層	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒微量、炭化物微量
第４層	10YR2/2	黒褐色土	焼土粒ブロック、炭化物少量
第５層	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒ブロック多量、炭化物少量
第６層	10YR4/4	褐色土	炭化物少量
第７層	10YR5/6	黄褐色土	ロームブロック多量、焼土粒少量、炭化物多量
第８層	10YR5/6	黄褐色土	ロームブロック

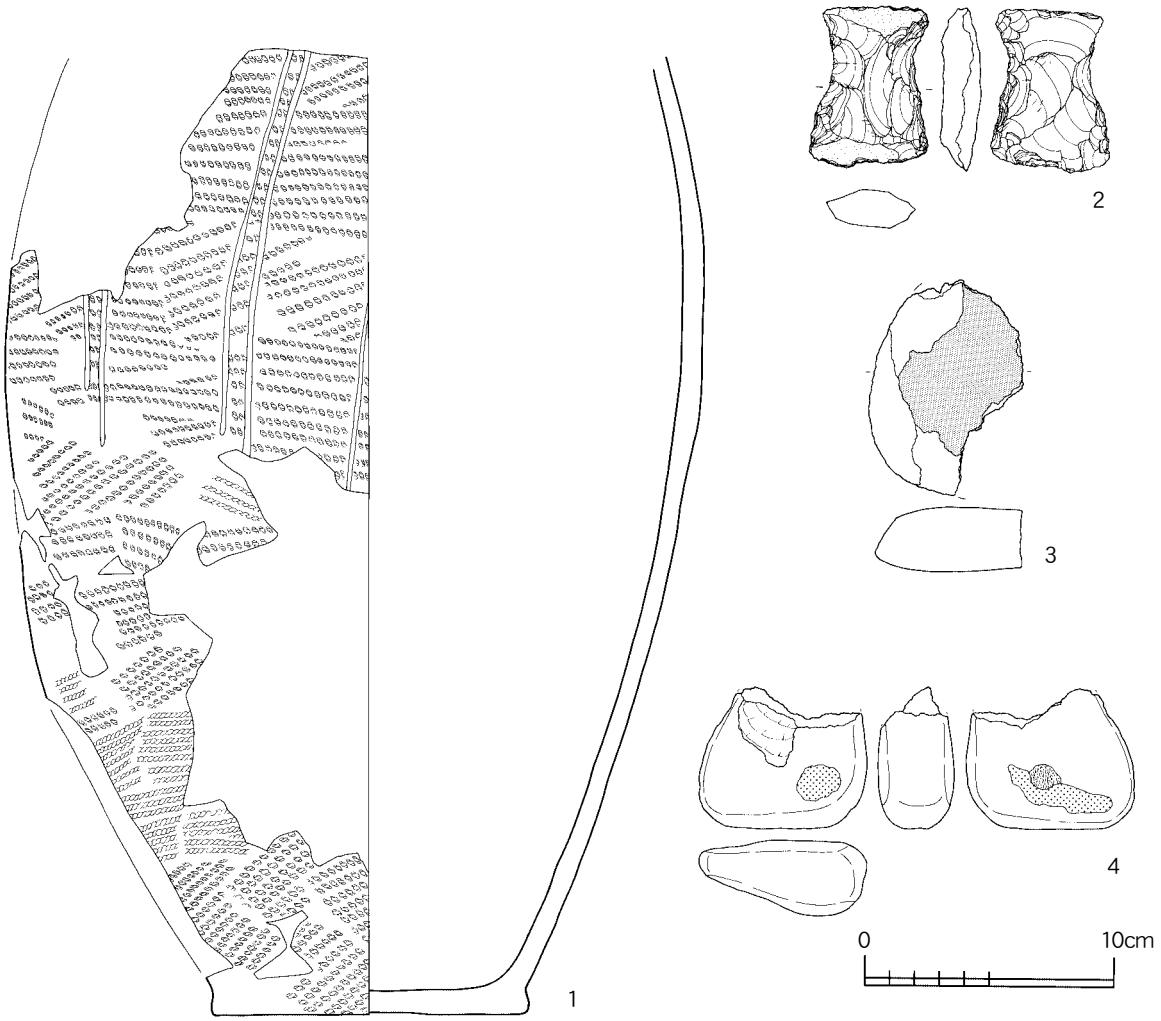
Pit1

第１層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒、炭化物粒、焼土粒極微量
第２層	10YR6/8	明黄褐色土	炭化物微量、焼土粒微量
第３層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物微量
第４層	10YR3/4	暗褐色土	炭化物少量、焼土粒微量
第５層	10YR5/8	黄褐色土	炭化物少量、焼土粒微量
第６層	10YR4/4	褐色土	炭化物粒微量、焼土粒極微量

第4図　SI-01①



第5図　SI-01②・SX-01・SI-01出土土器



第6図　SX-01出土遺物

第３節　遺構外出土遺物

（1）土器

本遺跡においては遺構外からダンボール換算で1.5箱分の土器が出土した。出土土器の時期については縄文時代中期後葉～後期前葉・弥生時代・平安時代にわたるが、その主体は縄文時代中期後半～後期初頭、平安時代である。以下、遺構外出土土器について分類ごとに記述する。

第Ⅰ群　縄文時代中期の土器（第７図１～19）

１類　円筒上層ｅ式土器に比定されるもの（１～３）

胴部破片が２点、口縁部破片１点出土した。１・２は胴部破片で地文を施した後、沈線を巡らせている。３は口唇部にＬＲ圧痕が施され、外面にはＬＲ縄文が施されている。色調については、１は茶褐色、２・３は灰褐色である。

２類　最花式土器に比定されるもの（４～６）

３点出土した。４は略完形の資料で、器形は底部から緩やかな傾斜をもって立ち上がり、胴部中半から直線的に口縁に至る。口縁部は折返口縁である。文様は地文を施した後、２条の沈線が巡らされている。５・６は同一個体と思われる口縁部破片で、折返口縁で口縁部がやや外反する。文様

は、地文を施した後、２条の沈線が巡らされている。

３類　縄文時代中期中葉～中期末葉の土器（７～19）

13点出土した。中期の土器であることは確かであるが、ほとんどが胴部破片であるため中期中葉～末葉の土器として一括した。８のように口縁部の破片がみられる。外面の文様は多くが斜縄文で12～15のように横位に展開したものや、19のように付加条のものもみられる。

第Ⅱ群　縄文時代後期の土器

１類　十腰内Ⅰ式に比定されるもの（第８図20～37）

ａ．横位の沈線文をもつもの（20～23）

口縁部破片３点、口頸部破片１点が出土した。器種は深鉢と思われる。多くが１条の沈線により文様が描出されているが、22のように２条の沈線によるものもみられる。口縁部破片については20のような波状のもののほか、21のように平縁のものがある。

ｂ．弧状文をもつもの（24～28）

口頸部破片２点、胴部破片５点が出土した。破片のため、器種については不明な点が多いが浅鉢類もあるものと思われる。文様はおよそ２～３条の沈線で弧状文が展開されているが、20・23のように１条の沈線で弧状文が施されているもの、30のように櫛歯状工具による文様が施されているものがある。

ｃ．沈線による格子状文をもつもの（31～33）

胴部破片が３点出土した。破片資料ではあるが残存部の状況から深鉢と推定できる。32・33は縦位の沈線を切るように横位の沈線が施され、31は縦位の沈線を跨ぐように沈線が施されている。

ｄ．無文のもの（34～37）

胴部破片４点が出土した。器種はおよそ深鉢と思われる。34は裏面に炭化物状の黒色物質が付着している。

第Ⅲ群　弥生時代前期の土器（第８図38・39）

口頸部破片１点，胴部破片１点が出土した。縦位のＲＬ縄文を地文とし、３条の沈線が施されている。器厚は比較的薄手である。文様などから二枚橋式に比定される。

第Ⅳ群　平安時代の土器（第８図40・41）

土師器甕の口縁部破片、土師器坏の破片が１点ずつ出土した。甕は内面、坏は外面と内面の一部に２次被熱の跡が残っており、内面には油痕状の黒色物資が付着している。甕の口唇部には１次焼成後、粘土を上塗りした痕跡があり、その部分にヘラナデが施されている。色調については甕・坏ともに黄橙色である。

（２）石器

本遺跡においては遺構外から石器が４点出土した。全て礫石器であり、器種は磨製石斧１点、敲石１点、磨石１点、礫１点である。

Ｂ．磨製石斧（第８図42）

ほぼ完形品が１点出土した。刃部、基部、両側部がやや摩滅しており、刃部の一部は欠損している。基部は先細りの状況を呈する。

Ｃ．敲磨器類（第８図43～45）

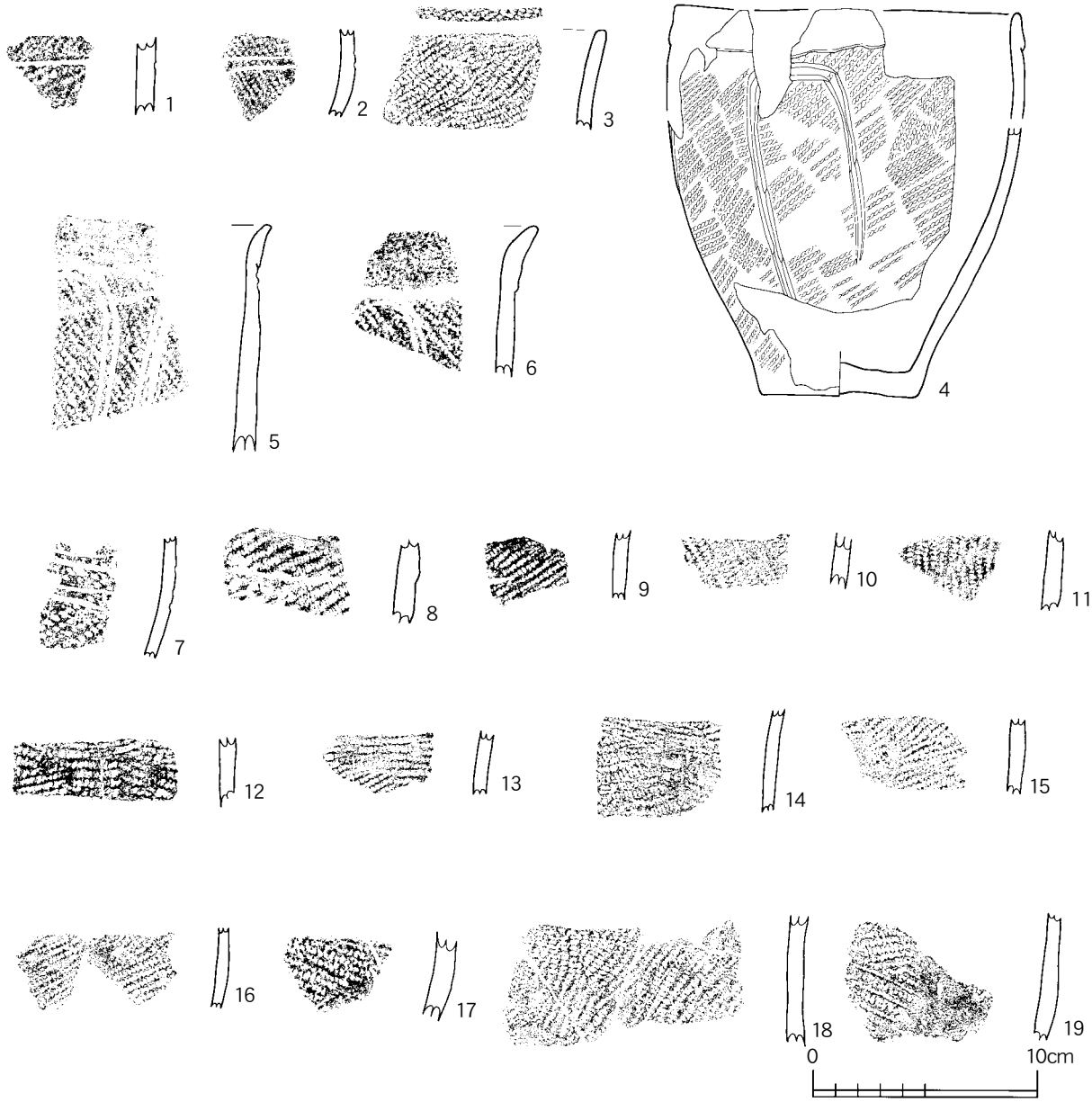
３点出土した。43は棒状を呈する石器で一つの面に幅７～８㎜前後の溝状の窪みを持ち、その左側面に磨り痕、両基部に敲き痕がみられ、所々に油痕状の黒色物質が付着している。44も43と同様に棒状を呈する石器で、一側面に窪みがみられ、基部には敲きの痕跡が残る。45は、特に磨り・敲き共に残っていないが、被熱の痕跡がみられる。

（３）土製品

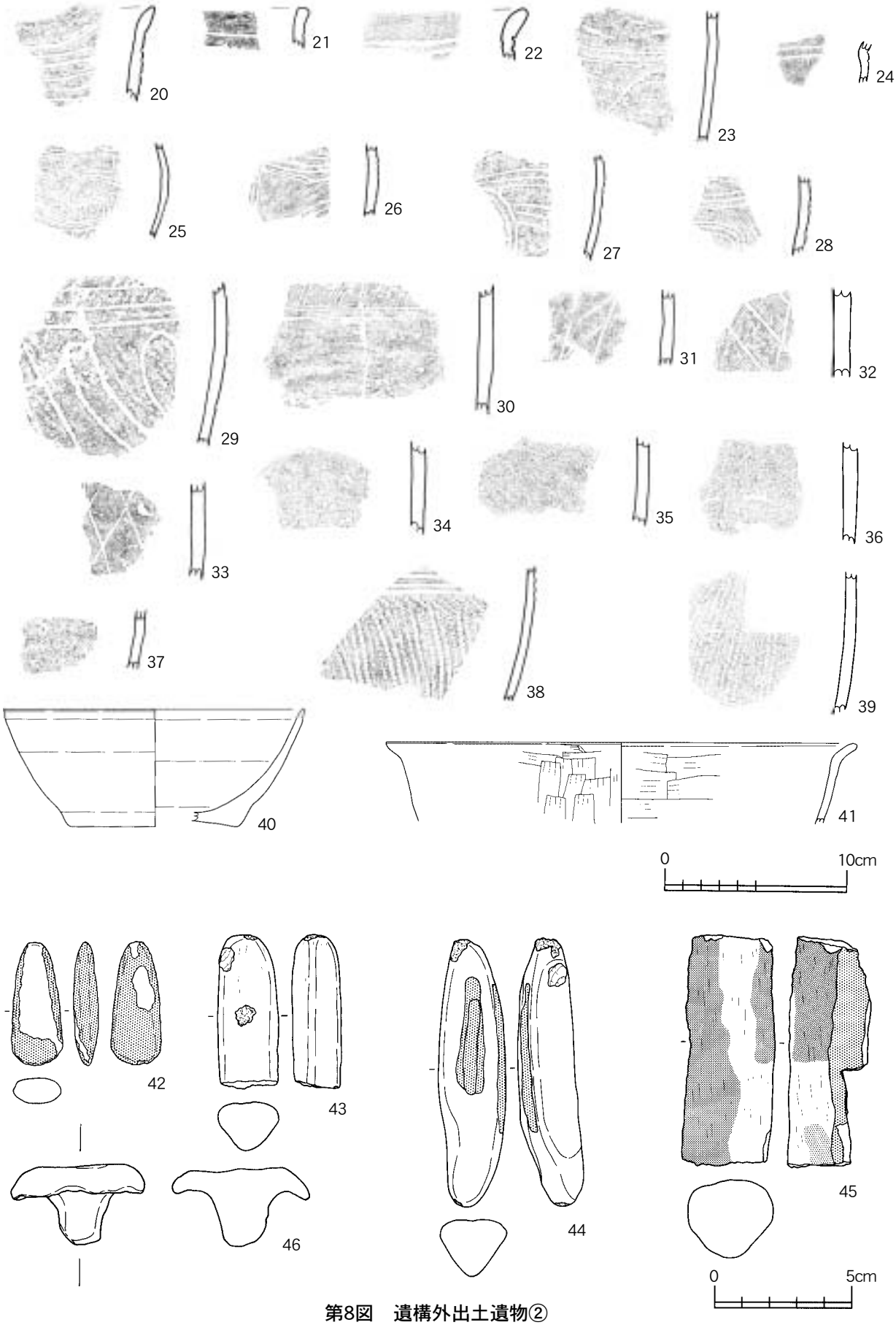
本遺跡からは遺構外から土製品が１点出土した。いわゆるキノコ形土製品である。

キノコ形土製品（第８図46）

１点出土した。カサの一部は欠損しているが、外縁部は下位にやや垂れ下がっている。カサの頂部は指頭圧痕によりややつぶされており、その中央部だけが少し突出している。軸の部分はカサ側に向かって太くなり、軸側がやや細い。



第7図　遺構外出土遺物①



第8図　遺構外出土遺物②

第２表　SI-01出土土器観察表

図版	番号	種別	出土地点	層位	器種	部位	器厚(mm)	文様	内面調整	焼成	分類	備考
5	1	土師器	SI-01ＳN1	フク土	甕	口縁～胴部	5	ヘラナデ	ヘラナデ	良	Ⅳ	
5	2	土師器	SI-01ＳN1	フク土	坏	完形	6	ロクロナデ	ロクロナデ	良	Ⅳ	
5	3	土師器	SI-01Pit2	フク土	坏	完形	6	ロクロナデ	ロクロナデ	良	Ⅳ	
5	4	土師器	SI-01ＳN1	フク土	甕	底部	17	ヘラナデ	ヘラナデ	良	Ⅳ	網代痕

第３表　ＳＸ-01出土土器観察表

図版	番号	種別	出土地点	層位	器種	部位	器厚(mm)	文様	内面調整	焼成	分類	備考
6	1	縄文土器	ＳX-01	フク土	深鉢	胴部～底部	9	ＲＬ押圧･沈線･ＲＬ回転	ナデ	良	Ⅰ2	

第４表　ＳＸ-01出土石器観察表

図版	番号	種別	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
6	2	不定形石器	ＳX-01	フク土	65	44	14	52	輝･凝	A	
6	3	敲磨器類	ＳX-01	フク土	(173)	(124)	51	(1438)	安	C	
6	4	敲磨器類	ＳX-01	フク土	(115)	136	60	(1046)	安	C	

第５表　遺構外出土土器観察表

図版	番号	種別	出土地点	層位	器種	部位	器厚(mm)	文様	内面調整	焼成	分類	備考
7	1	縄文土器	G-3	Ⅱ層	深鉢	胴部	8	ＬＲ回転･沈線	ナデ	良	Ⅰ1	
7	2	縄文土器	G-5	Ⅱ層	深鉢	胴部	7	ＬＲ回転･沈線	ナデ	良	Ⅰ1	
7	3	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	口縁部	6	ＲＬ押圧･ＲＬ回転	ナデ	良	Ⅰ1	
7	4	縄文土器	G-5	Ⅱ層	深鉢	口縁～底部	6	ＬＲ回転･沈線	ナデ	良	Ⅰ2	折返口縁
7	5	縄文土器	E-5	Ⅱ層	深鉢	口縁～胴部	9	ＲＬ回転･沈線	ナデ	良	Ⅰ2	折返口縁･6と同一固体
7	6	縄文土器	E-5	Ⅱ層	深鉢	胴部	9	ＲＬ回転･沈線	ナデ	良	Ⅰ2	折返口縁･5と同一固体
7	7	縄文土器	G-5	Ⅱ層	深鉢	胴部	7	ＲＬ回転･沈線	ナデ	良	Ⅰ3	
7	8	縄文土器	G-3	フク土	深鉢	胴部	6	ＬＲ（０段多条）	ナデ	良	Ⅰ3	折返口縁
7	9	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	9	ＲＬ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	10	縄文土器	G-3	Ⅱ層	深鉢	胴部	6	ＲＬ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	11	縄文土器	G-3	確認面	深鉢	胴部	7	ＬＲ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	12	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	8	ＲＬ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	13	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	7	ＲＬ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	14	縄文土器	G-3	Ⅱ層	深鉢	胴部	5	ＬＲ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	15	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	5	ＬＲ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	16	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	7	ＬＲ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	17	縄文土器	調査区外	表採	深鉢	胴部	9	ＲＬ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	18	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	5	ＬＲ回転	ナデ	良	Ⅰ3	
7	19	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	7	ＲＬ回転（Ｒ）付加	ナデ	良	Ⅰ3	
8	20	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	8	沈線（横位）	ナデ	良	Ⅱ1a	
8	21	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	口縁部	7	沈線（横位）	ナデ	良	Ⅱ1a	
8	22	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	口縁部	7	沈線（横位）	ナデ	良	Ⅱ1a	
8	23	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	口縁部	10	沈線（横位）	ナデ	良	Ⅱ1a	
8	24	縄文土器	G-2	Ⅱ層	鉢	口縁部	5	弧状文（２条）	ナデ	良	Ⅱ1b	
8	25	縄文土器	G-2	Ⅱ層	深鉢	胴部	5	弧状文によるＳ字文	ナデ	良	Ⅱ1b	
8	26	縄文土器	G-3	Ⅱ層	深鉢	胴部	4	弧状文	ナデ	良	Ⅱ1b	
8	27	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	6	弧状文	ナデ	良	Ⅱ1b	
8	28	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	5	弧状文	ナデ	良	Ⅱ1b	
8	29	縄文土器	G-3	Ⅱ層	深鉢	胴部	5.5	弧状文	ナデ	良	Ⅱ1b	
8	30	縄文土器	G-3	カクラン	深鉢	胴部	7	櫛葉状沈線	ナデ	良	Ⅱ1b	
8	31	縄文土器	G-2	Ⅱ層	深鉢	胴部	8	格子目文	ナデ	良	Ⅱ1c	
8	32	縄文土器	G-2	カクラン	深鉢	胴部	7	格子目文	ナデ	良	Ⅱ1c	
8	33	縄文土器	G-2	カクラン	深鉢	胴部	9	格子目文	ナデ	良	Ⅱ1c	
8	34	縄文土器	G-2	カクラン	深鉢	胴部	7	無文	ナデ	良	Ⅱ1d	
8	35	縄文土器	G-3	Ⅱ層	深鉢	胴部	7	無文	ナデ	良	Ⅱ1d	
8	36	縄文土器	G-3	Ⅱ層	深鉢	胴部	6	無文	ナデ	良	Ⅱ1d	
8	37	縄文土器	G-3	Ⅱ層	深鉢	胴部	8	無文	ナデ	良	Ⅱ1d	裏面に炭化物
8	38	弥生土器	G-3	フク土	深鉢	胴部	5	沈線･ＬＲ回転	ナデ	良	Ⅲ	39と同一個体
8	39	弥生土器	G-3	フク土	深鉢	胴部	5	ＬＲ回転	ナデ	良	Ⅲ	38と同一個体
8	40	土師器	G-3	カクラン	坏	口縁～底部	8	ロクロナデ	ロクロナデ	良	Ⅳ	
8	41	土師器	G-3	カクラン	甕	口縁～頸部	4	ヘラナデ	ヘラナデ	良	Ⅳ	

第６表　遺構外出土石器観察表

図版	番号	種別	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
8	42	磨製石斧	G-3	カクラン	89	37	18	86	石･安	B	
8	43	敲磨器類	E-5	表採	(112)	46	33	(274)	デ	C	
8	44	敲磨器類	G-3	カクラン	193	49	41	538	変･安	C	
8	45	敲磨器類	G-3	Ⅰ	(166)	66	59	(868)	安	C	

第７表　遺構外出土土製品観察表

図版	番号	種別	出土地点	層位	最大計測値				備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	
8	46	きのこ形土製品	G-3	Ⅰ	29	48.5	29	26	

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　三内丸山（８）遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

青森県青森市三内丸山（８）遺跡では、平安時代の竪穴住居跡のほか、縄文時代中期後半～後期前半・弥生時代の土器・石器が確認されている。今回の分析調査では、出土した炭化材を対象に放射性炭素年代測定を実施し、遺構の年代に関する情報を得る。

１．試料

試料は、住居跡ＳＩ－01から出土した炭化材１点である。

２．分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、ＡＭＳ法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986－2002　M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。なお、炭化材については、実体鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施する。

３．結果

結果を表１・２に示す。試料の測定年代（補正年代）は、1130ＢＰの９世紀頃に相当する値を示す。なお、測定試料は、針葉樹に同定された。

今後は、同一遺構・同一層準から出土した炭化材等の測定点数を増やすことにより、さらに詳細な年代資料が得られると思われる。

表１．放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料名	試料の質	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
1 SI－01 SN付近	炭化材	針葉樹	1130±40	－25.75±0.82	1140±40	IAAA－41873

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）		相対比	Code No.
1 SI－01 SN付近	1131±37	cal AD 889 － cal AD 977	cal BP 1061 － 973	1.000	IAAA－41873

１）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986－2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第２節　三内丸山（８）遺跡出土土師器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

青森県青森市三内丸山（８）遺跡では、古代とされる土師器が数点出土している。発掘調査所見では、本遺跡の立地する台地を構成している火砕流堆積物に由来する粘土が、土器の材料として使用され、また粘土の採取された火砕流堆積物の給源や噴出年代および分布域の特定が、当時の人々の行動域推定に関わる情報になるものと期待されている。

今回の分析調査では、上述の課題に対して、土器の材質（胎土）の特徴を捉えることにより、胎土が複数種存在することが確認された場合、土器胎土間あるいは土器胎土と堆積物間の類似性や異質性を検討し、可能な限り土器胎土の由来を推定する。

１．試料

試料は、三内丸山（８）遺跡より出土した古代とされる土師器片３点、三内丸山遺跡の位置する台地とは一連の台地上に位置する、栄山（３）遺跡より出土した同時期とされる土師器片２点、および栄山地区より採取された粘土１点とそれを実験焼成した（800℃で２時間）粘土板試料１点の合計７点である。試料には、上記の順に試料番号１～７が付されている。各試料の器種、部位、出土地点・層位などは、分析結果を呈示した図１に併記する。

２．分析方法

当社では、これまでに青森市野木遺跡、稲山遺跡、小牧野遺跡、雲谷山吹遺跡などにおいて、古代の土師器や縄文土器について胎土分析を行ってきた。分析方法は、目的と土器の質を考慮して重鉱物分析を用いた。今回も、これまでの資料との比較を考慮し、同様の方法を用いる。以下に処理方法を述べる。

試料は、適量をアルミナ製乳鉢で粉砕、水を加え超音波洗浄装置により分散、＃250の分析篩により水洗、粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4㎜－1/8㎜の粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

３．結果

結果を表１、図１に示す。７点の試料は、いずれも斜方輝石が最も多く、他に単斜輝石、角閃石（一部は酸化角閃石も含む）、不透明鉱物を伴うという共通点が認められる。一方で、それら４鉱物間の量比関係は、以下に述べるように一様ではない。

三内丸山（８）遺跡より出土した試料番号１は、斜方輝石に次いで単斜輝石が多く、角閃石と不透明鉱物は微量である。三内丸山（８）遺跡出土の試料番号２、３、さらに栄山地区採取の粘土とその焼成粘土板は、いずれも斜方輝石に次いで不透明鉱物が多く含まれる。その中で、試料番号３と試料番号６、７は、単斜輝石と角閃石（試料番号３はほとんど酸化角閃石となっている）の量比が近似しているが、試

料番号２は、単斜輝石が微量である。栄山（３）遺跡出土の試料番号４は、単斜輝石、角閃石、不透明鉱物の３者の量比がいずれも少量で近似した組成であり、栄山（３）遺跡の試料番号５は、角閃石の量比が斜方輝石とほぼ同程度に多く、単斜輝石と不透明鉱物は少量である。

４．考察

これまでに当社が行った青森市内遺跡出土土器の胎土分析のうち、古代の土師器を対象とした分析例では、野木遺跡および雲谷山吹遺跡での分析例がある。野木遺跡の位置する台地は、三内丸山遺跡および栄山遺跡の位置する台地から東南方にあり、間には堤川の沖積低地が広がっている。雲谷山吹遺跡の位置する台地は、野木遺跡の台地とは合子沢川の谷を挟んで、さらに東方にある。沢田（1977）は、青森市南部に広がる台地を構成する地質を田代平溶結凝灰岩とよび、その上位に三内火山灰、大谷火山灰、月見野火山灰が堆積するとした。また、各火山灰の重鉱物組成を台地の各所において分析しており、三内火山灰には角閃石が多く含まれることや大谷火山灰には角閃石が微量であること、月見野火山灰の組成は斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物が多く、少量の角閃石を含むことなどを明らかにした。

一方、当社が行った土器の胎土重鉱物分析では、野木遺跡では20点、雲谷山吹遺跡では12点の試料から、Ａ～Ｉ類まで分類される重鉱物組成が得られている。ただし、いずれの組成も斜方輝石、単斜輝石、角閃石、不透明鉱物の４者から構成されていることは共通し、その４者間の量比関係で分類している。このような重鉱物組成は、上述した台地を構成する火山灰各層の重鉱物組成と調和的であり、おそらく台地分布域内から採取された粘土や砂が使用されていることを示唆する。したがって、今回の各試料についても、台地分布域内の原材料が使われている可能性が高い。なお、沢田（1977）の分析例からは、重鉱物組成の違いは、火山灰層の層位的な違いが強く反映されており、平面的な位置の違いは、それよりも小さい。すなわち、台地の分布域内においては、採取箇所が異なる粘土でも、同じ層位の火山灰に由来するものであれば、その重鉱物組成は類似したものとなる。したがって、台地分布域内の離れた遺跡間において類似した胎土重鉱物を有する土器が検出されても、それらが直接関係のあるものという評価はできない。今回の土器試料では、栄山地区採取の粘土と組成が類似するものとして三内丸山（８）遺跡の試料番号３があげられ、それ以外の試料については、栄山（３）遺跡の試料も含めて、特徴が異なる。少なくとも栄山地区採取の粘土がそのまま試料番号４や５の材料となっている可能性は低いと言えるが、栄山地区の粘土が三内丸山遺跡の試料番号３の材料となっている可能性については、現時点では不明である。

野木遺跡および雲谷山吹遺跡の分析結果における各分類については、ここで述べないが、各遺跡の傾向として、野木遺跡では斜方輝石と単斜輝石を主体とする組成の試料が多く、雲谷山吹遺跡では斜方輝石と角閃石を主体とする組成の試料が多いことが看取された。また、その傾向から、両遺跡間では、土器製作に係わる何らかの事情の違いがあった可能性が高いとも述べた。今回の分析では、各遺跡の傾向が得られるほどの点数ではないが、三内丸山（８）遺跡内と栄山（３）遺跡内それに両遺跡間において複数種の胎土が存在することは確認できた。その中で、三内丸山（８）遺跡の試料番号１と栄山（３）遺跡の試料番号４は、野木遺跡の試料に多く認められた組成に類似し、栄山（３）遺跡の試料番号５は雲谷山吹遺跡の試料に多く認められた組成に類似する。これらに対して、三内丸山（８）遺跡の試料番号２、３および栄山地区採取粘土のように不透明鉱物の比較的多い組成は、野木遺跡にも雲谷山吹遺跡にも少数であった。これだけの結果ではあるが、三内丸山（８）遺跡および栄山遺跡にもそれぞれ異なる土器胎土の傾

向が存在する可能性があると考えられる。

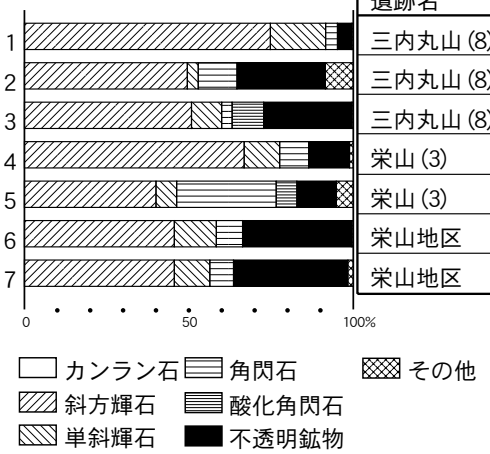
なお、前述した各火山灰の重鉱物組成の特徴と上記各遺跡の傾向の違いを関連させるならば、角閃石の多い傾向にある遺跡では、三内火山灰を主たる材料とし、斜方輝石、単斜輝石および不透明鉱物の多い傾向にある遺跡では月見野火山灰を主たる材料としていると言うような事情も想定できる。沢田（1977）の記載から、三内火山灰も月見野火山灰も台地の崖などに広く露出していると考えられるから、どちらを選ぶかその選択基準の背景には、それぞれの作り手における事情があったと考えられる。今後も、同地域において土器および各所の自然堆積物の分析例を蓄積するとともに、さらに重鉱物組成以外の胎土の特徴（例えば砂粒の粒径や岩石片の種類構成など）も捉えることができれば、より詳細な土器の製作事情について考えることが可能になると期待される。

引用文献

沢田庄一郎，1977,「青森市周辺に分布する第四紀火山噴出物について」.『青森地学』，29，ｐ１－４.

表１．胎土重鉱物分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計
1	0	187	42	9	0	0	11	1	250
2	0	105	7	25	0	0	57	18	212
3	0	127	23	8	24	0	67	1	250
4	0	167	27	22	0	0	31	3	250
5	2	70	11	53	11	0	21	7	175
6	0	114	32	20	0	0	83	1	250
7	0	114	27	18	1	1	87	2	250



遺跡名	種別	出土地点・層位	取上番号	外面特徴	内面特徴
三内丸山 (8)	甕・口縁部	G5Ⅱ層	P-X	ヨコナデ	ナデ
三内丸山 (8)	甕・胴部	F4Ⅱ層	P-X	タテケズリ	ナデ
三内丸山 (8)	椀・底部付近	SI-0 1覆土	P-X	ナデ	ヨコナデ
栄山 (3)	甕・胴部	A-28　Ⅲ	P- 一括	タテケズリ	ナデ
栄山 (3)	椀・胴部	SI-0 1覆土	P- 一括	ナデ	ナデ
栄山地区	粘土				
栄山地区	焼成粘土版				

図 1.　胎土重鉱物組成

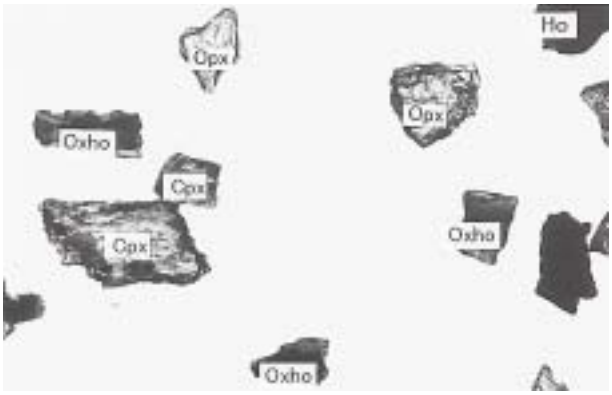
図版１　胎土中の重鉱物

１．試料番号１　三内丸山(８)遺跡　甕･口縁部

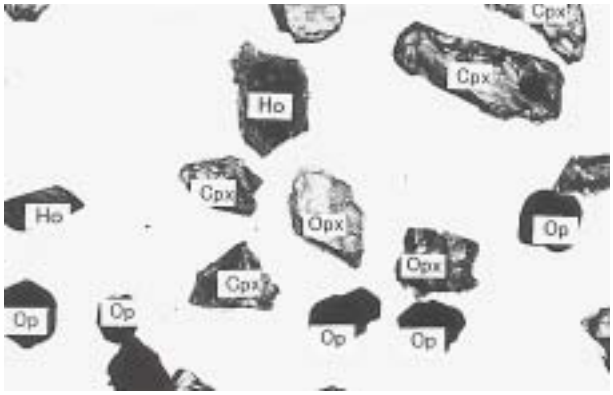
２．試料番号２　三内丸山(８)遺跡　甕･胴部

３．試料番号３　三内丸山(８)遺跡　椀･底部付近

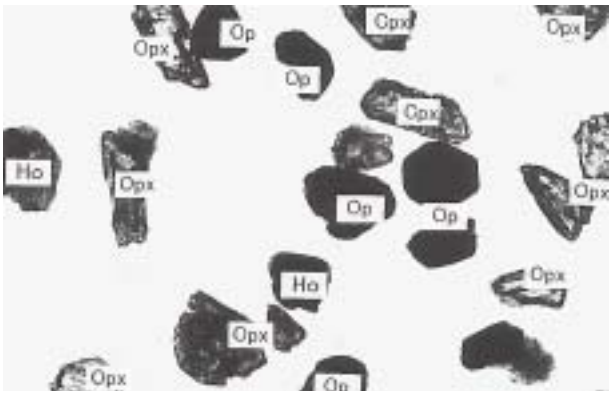
４．試料番号４　栄山(３)遺跡　甕･胴部



５．試料番号５　栄山(３)遺跡　椀･胴部



６．試料番号６　栄山地区　粘土



７．試料番号７　栄山地区　焼成粘土版

Opx：斜方輝石　Cpx：単斜輝石　Ho：角閃石　Oxho：酸化角閃石　Op：不透明鉱物

0.5mm

ま　と　め

本遺跡の発掘調査は、都市計画道路３・４・15号里見丸山線建設事業予定地内の一部（500㎡）を対象に実施した。調査の結果、縄文時代中期後半の屋外炉１基、平安時代の竪穴住居跡１軒を検出したほか、遺物は縄文時代中期中葉～後期前葉の土器、弥生時代前期の二枚橋式土器、平安時代の土師器が出土しており、縄文時代・弥生時代・平安時代の複合遺跡であることが判明した。ここでは調査で明らかになった事項についてまとめたい。

平安時代の竪穴住居跡は、削平を受けていたため、残存状態は決して良好ではなかった。竪穴住居跡の時期については、放射性炭素年代測定の結果や遺跡内から須恵器が出土していないことから、９世紀後半代と考えられる。本遺跡南側には三内丸山（３）遺跡が所在しており、今年度の試掘調査の結果、平安時代の遺物が確認されており、本遺跡一帯に平安時代の集落跡が広がっていた可能性がある。

屋外炉（石囲炉）については、本文にも記載しているとおり、炉の直上に最花式土器のほか礫石器が広がっていたことから、炉跡の時期については土器の年代から縄文時代中期後半の炉跡と認定した。遺物については、縄文時代中期後葉～後期前葉の土器が主体であった。三内・安田地区においては、近野遺跡、三内丸山（６）遺跡等の周辺の遺跡において本遺跡同様に中期後半～後期初頭を主体とする遺跡が多いことから、当該期の遺構・遺物の広がりは広範囲に展開していたことが推測される。

本遺跡は南側から続く海成起源の台地の縁辺部にあたるためか、平安時代の竪穴住居跡１軒、縄文時代中期後半の屋外炉１基が検出されただけであり、集落としても縁辺部的な様相であった。遺跡の本体については、今年度、調査区南側について当委員会が試掘調査を実施した結果、平安時代を主体とする竪穴住居跡・溝跡などが確認されており、おそらくその部分が遺跡の本体と考えられる。

最後に埋蔵文化財保護の趣旨をご理解いただき、昨年度の試掘調査から今年度の発掘調査終了までご協力いただいた青森市都市整備部道路建設課に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

引用・参考文献

青森県教育委員会　1974　『近野遺跡（１）発掘調査報告書　県営運動公園建設関係埋蔵文化財発掘調査』青森県埋蔵文化財調査報告書第12集

青森県教育委員会　1975　『近野遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集

青森県教育委員会　1977　『近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）・三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集

青森県教育委員会　1978ａ　『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集

青森県教育委員会　1978ｂ　『三内澤部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集

青森県教育委員会　1979　『近野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第47集

青森県教育委員会　1994　『三内丸山（２）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集

青森県教育委員会　1997　『近野遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第216集

青森県教育委員会　1999ａ　『安田（２）遺跡－東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』青森県埋蔵文化財調査報告書第255集

青森県教育委員会　1999ｂ　『三内丸山（６）遺跡Ⅰ－東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書第257集

青森県教育委員会　1999ｃ　『三内丸山（５）遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第269集

青森県教育委員会　2000　『三内丸山（６）遺跡Ⅱ－東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う発掘調査報告－』青森県埋蔵文化財調査報告書第279集

青森県教育委員会　2001ａ　『安田（２）遺跡Ⅱ－東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』青森県埋蔵文化財調査報告書第303集

青森県教育委員会　2001ｂ　『三内丸山（６）遺跡Ⅲ－東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う発掘調査報告－』青森県埋蔵文化財調査報告書第307集

青森県教育委員会　2001ｃ　『三内丸山（６）遺跡Ⅳ－東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う発掘調査報告－』青森県埋蔵文化財調査報告書第315集

青森県教育委員会　2002ａ　『近野遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第315集

青森県教育委員会　2002ｂ　『安田（２）遺跡Ⅲ－東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』青森県埋蔵文化財調査報告書第321集

青森県教育委員会　2003　『三内丸山遺跡22－第13・14・17・20次調査報告書１』青森県埋蔵文化財調査報告書第362集

青森県教育委員会　2004　『三内丸山（５）遺跡Ⅱ　近野遺跡Ⅶ－県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－』青森県埋蔵文化財報告書第370集

青森市教育委員会　1962　『三内霊園遺跡調査概報』青森市の文化財１

青森市教育委員会　1970　『三内丸山遺跡調査概報』青森市の文化財４

青森市教育委員会　2001ａ　『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第54集

青森市教育委員会　2001ｂ　『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』青森市埋蔵文化財調査報告書第55集

青森市教育委員会　2003　『近野遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第68集

青森市教育委員会　2004ａ　『市内遺跡発掘調査報告書12』青森市埋蔵文化財調査報告書第74集

青森市教育委員会　2004ｂ　『江渡遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第75集

野辺地町教育委員会　2001　『向田(24)遺跡　有戸鳥井平（４）遺跡　有戸鳥井平（５）遺跡－国道279号有戸バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』野辺地町文化財調査報告書第７集

工藤伸一・鈴木克彦　1998　「キノコ形土製品について」『研究紀要』第３号　青森県埋蔵文化財調査センター

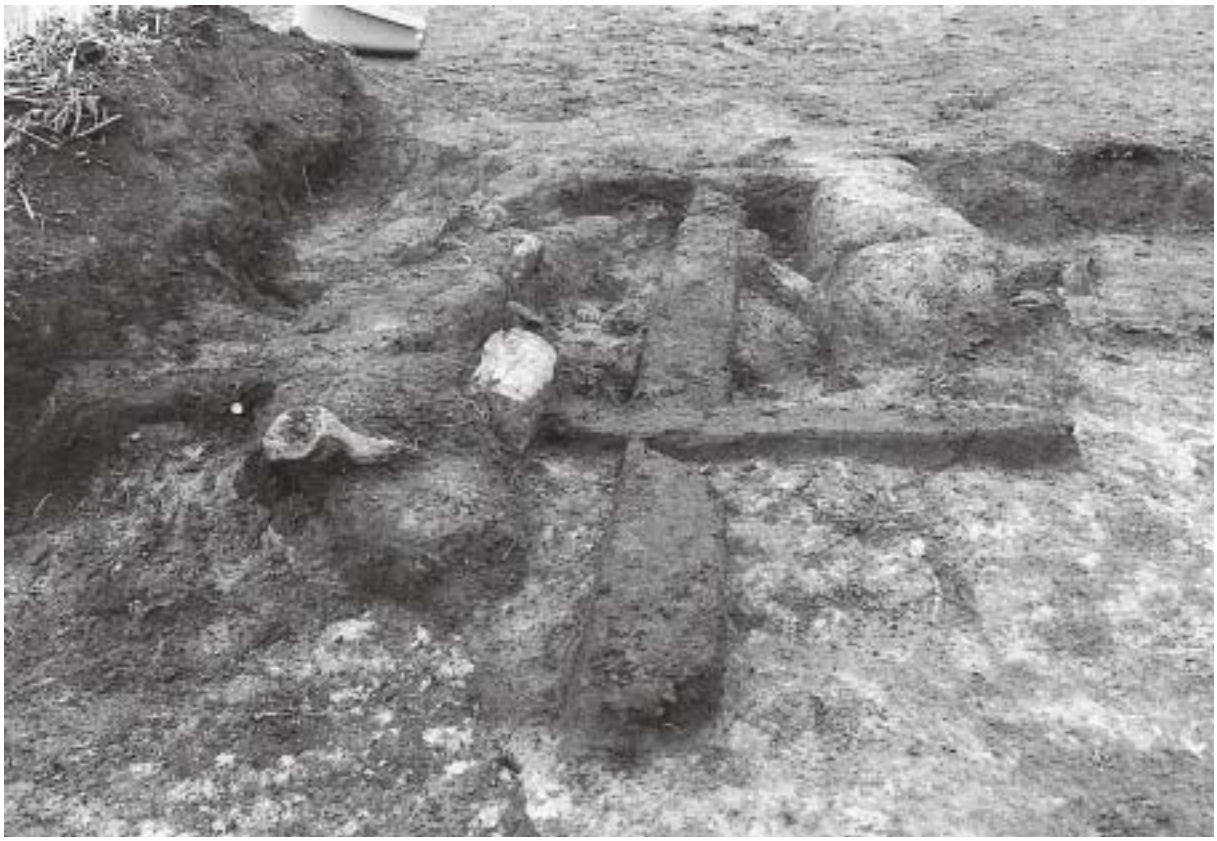
鈴木　克彦　2001　『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣出版

写　真　図　版

遺跡近景

SI-01　完掘（W→）

写真１



SI-01SN　セクション　SPA-B → SPC-D

SI-01SN　完掘（W→）

写真２

SI-01　炭化物・粘土・炭化材検出状況（W→）

SI-01　Pit1　遺物出土状況①（W→）

写真３

SI-01　Pit1　遺物出土状況②（W→）

SI-01内　Pit1　セクション①（W→）

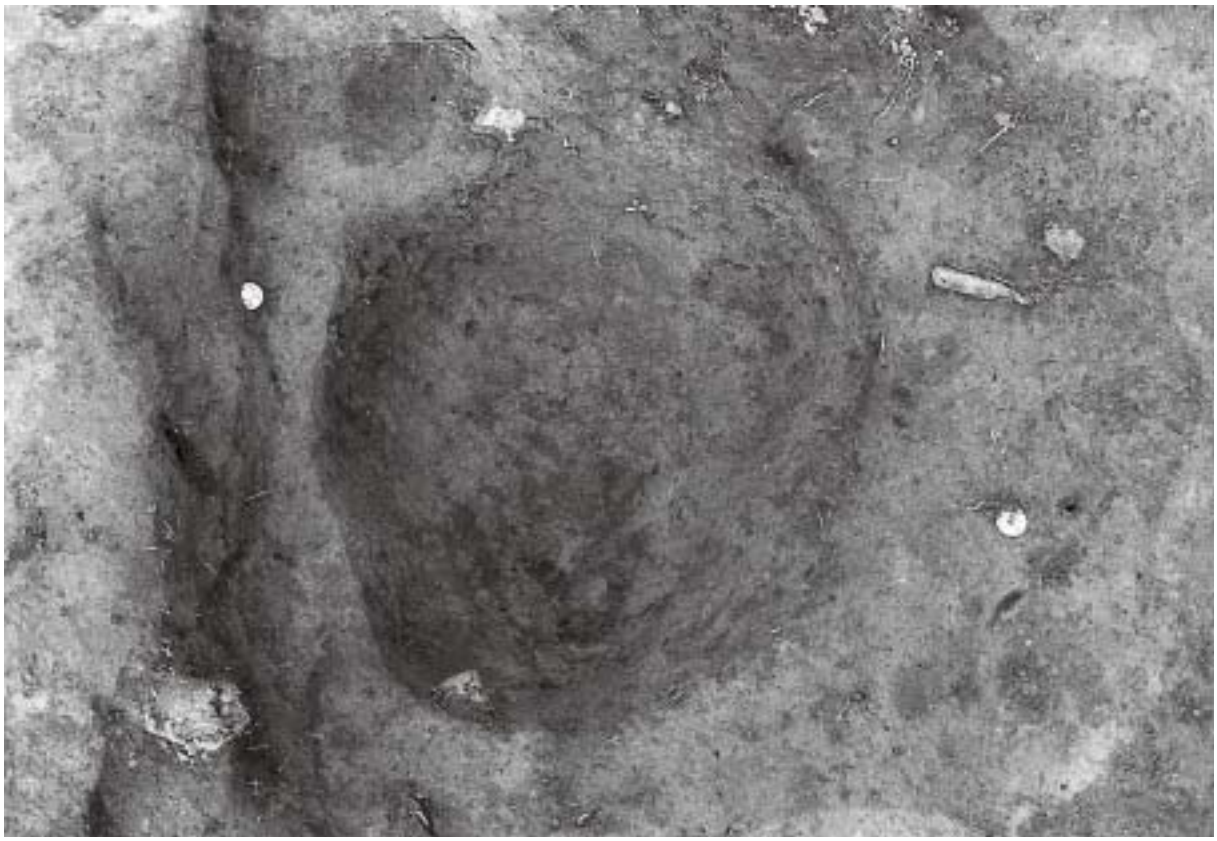
写真４

SI-01内　Pit1　セクション②（E→）

SI-01内　Pit1　完掘（E→）

写真５

SI-01内　Pit2　完掘（W→）



SI-01内　Pit3　完掘（W→）

写真６

SX-01　確認（N→）

SX-01　確認（S→）

写真７

SX-01　遺物出土状況（N→）

SX-01　完掘（S→）

写真８

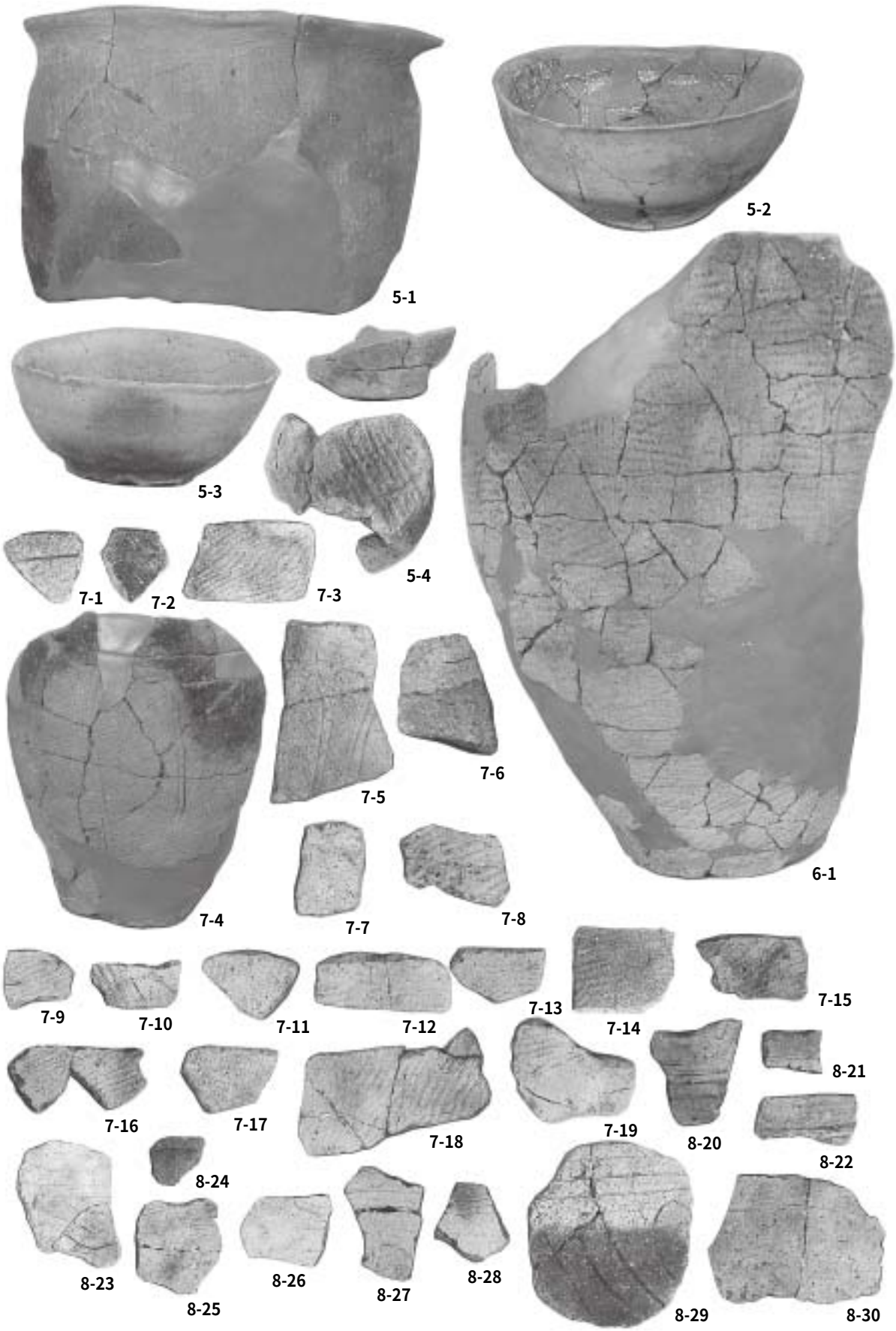

5-1
5-2
5-3
5-4
6-1
7-1
7-2
7-3
7-4
7-5
7-6
7-7
7-8
7-9
7-10
7-11
7-12
7-13
7-14
7-15
7-16
7-17
7-18
7-19
8-20
8-21
8-22
8-23
8-24
8-25
8-26
8-27
8-28
8-29
8-30

写真９　出土遺物

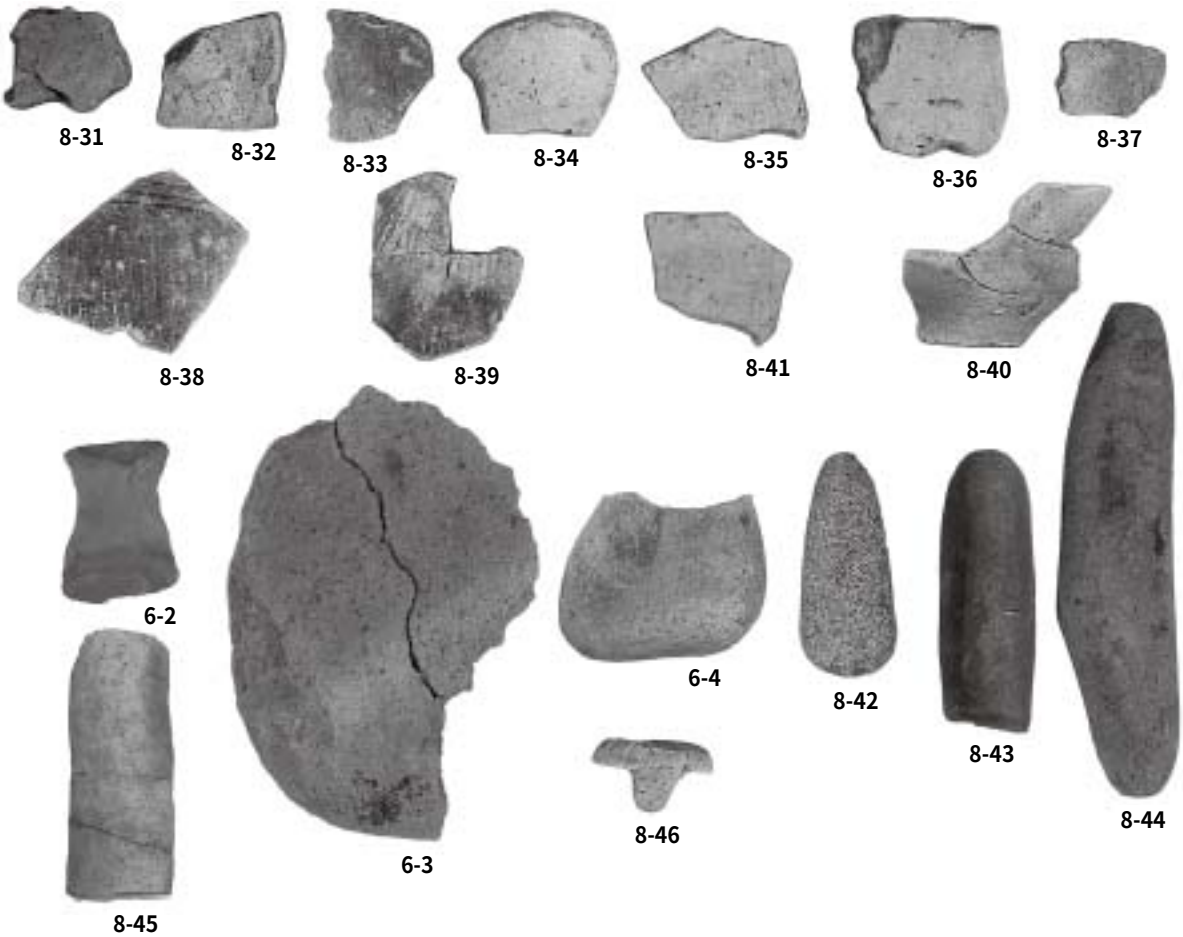

8-31
8-32
8-33
8-34
8-35
8-36
8-37
8-38
8-39
8-41
8-40
6-2
6-3
6-4
8-42
8-43
8-44
8-46
8-45

写真10　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	さんないまるやまかっこはちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	三内丸山(８)遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第78集
編著者名	設楽政健、児玉大成
編集機関	青森市教育委員会
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央１丁目22－5　TEL 017－734－1111
発行年月日	西暦　2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
さんないまるやまかっこはち 三内丸山(８)	あおもりしおおあざ 青森市大字 さんないあざまるやま 三内字丸山	01	315	40° 49′ 02″	140° 42′ 28″	20041025 ～ 20041126	500	都市計画道路３・４・15号里見丸山線建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三内丸山(８)	集落跡	縄文時代	屋外炉　１基	縄文土器 石器 土製品	中期後葉～後期前葉の土器が主体
		弥生時代		弥生土器 （二枚橋式土器）	
		平安時代	竪穴住居跡　１軒	土師器	

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蛍沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』
〃		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1987	『横内城跡発掘調査報告書』
〃		1988	『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書			
	第16集	1991	『山吹（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山（２）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994	『三内丸山（２）・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯（１）遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯（１）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997	『葛野（２）遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第36集	1998	『桜峯（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
青森市埋蔵文化財調査報告書			
	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第44集	1999	『葛野（２）遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
〃	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
〃	第49集	2000	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第51集	2000	『桜峯（１）・雲谷山吹（３）遺跡発掘調査報告書』
〃	第52集	2000	『大矢沢野田（１）遺跡調査報告書』
〃	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第54集	2001	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第55集	2001	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
〃	第56集	2001	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〃	第57集	2001	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃	第58集	2001	『大矢沢野田（１）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第59集	2001	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第60集	2002	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
〃	第61集	2002	『大矢沢野田（１）遺跡発掘調査報告書』
〃	第62集	2002	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第63集	2002	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第64集	2002	『雲谷山吹（４）～（７）遺跡発掘調査報告書』
〃	第65集	2003	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
〃	第66集	2003	『市内遺跡発掘調査報告書10』
〃	第67集	2003	『深沢（３）遺跡発掘調査報告書』
〃	第68集	2003	『近野遺跡発掘調査報告書』
〃	第69集	2003	『市内遺跡発掘調査報告書11』
〃	第70集	2003	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
〃	第71集	2004	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第72集	2004	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第73集	2004	『新町野遺跡発掘調査概報』
〃	第74集	2004	『市内遺跡発掘調査報告書12』
〃	第75集	2004	『江渡遺跡発掘調査報告書』
〃	第76集	2005	『栄山（３）遺跡発掘調査報告書』
〃	第77集	2005	『赤坂遺跡発掘調査報告書』
〃	第78集	2005	『三内丸山（８）遺跡発掘調査報告書』
〃	第79集	2005	『市内遺跡発掘調査報告書13』
〃	第80集	2005	『合子沢松森（２）遺跡発掘調査概報』
〃	第81集	2005	『石江遺跡群発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第78集

三内丸山（８）遺跡発掘調査報告書

発行年月日　平 成 17 年 3 月 31 日

発　　行　青 森 市 教 育 委 員 会
〒030-8555 青森市中央一丁目22-５
TEL 017-734-1111

印　　刷　青森オフセット印刷株式会社
〒030-0802 青森市本町二丁目11-16
TEL 017-775-1431